

小学校教員養成課程学生の教科に関する 意識変化の縦断的研究

Longitudinal Study of the Students' Opinions on their Curricula for Elementary School Education

麓 信義*・小山 秀哉*

Nobuyoshi Fumoto

Shuhya Oyama

(1987. 7. 16 受理)

論文要旨

小学校教員養成課程の昭和58年入学生について、3年次に、小学校で教える8教科の意識を中心としたアンケート調査を実施し、これを、1年次の調査と比較した。その結果、教科の重要性の意識は、全体的に向上したが、好みや教え易さについては、評価が高くなる教科も低くなる教科もあった。一方、実技教科（音楽・図画工作・体育）の必修化については、賛成者がそれほど増えなかったが、不得意なものは履修させる必要はない、という完全反対者の率は、かなり低下した。この項目への回答は、体育の重要性や好みの評価、および、教員志望の強さとある程度の関連が見られた。以上のことから、58年入学生については、教科としての重要性の評価の高まりと必修の是非が連動していない、と判断された。これを、同様の調査を行った54年入学生と比較すると、女子では、54年入学生の方が意識と行動が連動していたと推察された。

緒言

筆者等は小学校教員養成課程（以下小学校課程と称する）学生に対するアンケート調査を実施し、教職内容に関する学生の意識の変化を横断的に調査し、教科の重要性に関しては、在学中に意識が高まるが、教え易さの意識は、各教科の授業や教育実習を経験しているにもかかわらず、それほど向上せず¹⁾、卒業後の教師経験によって向上すること²⁾を報告した。実技教科（音楽・図画工作・体育）の重要性についても、教科の重要性の意識の一般的な向上と連動して意識が高まり、免許法上は実技3教科のうち2教科選択必修となっているが、3教科とも必修にすべきであるという意見が在学年数の増加に伴い多くなる傾向が認められた¹⁾。上述した学年進行に伴う変化は横断的調査に基づくものであったので、今回は、それが縦断的調査においても認められるかどうかを確認するために、前回調査時に1年生であった者が3年生の終わりに近づいた2月にほぼ同様のアンケート調査を実施した。本報告は、この結果を前回報告した1年生時のデータと比較したものである。

方法

調査対象者は、昭和58年入学の弘前大学教育学部小学校課程学生であり、調査は3年生の2月に、小学専門体育実技（以下小専体育と呼ぶ）という科目のテスト待ちの時間に行われた。制度上は音楽・図画工作・体育のうち2教科選択必修であるが、この科目は小学校課程学生の8割程度が毎年受講している。非受講者については、4年生になってから、個別にアンケート用紙を渡し回答させた。彼らについては、この授業を履修しなかった理由等の調査もあわせて行った。

有効回答数は、履修者122名（うち、男子60名）、非履修者27名（男子12名中8名、女子26名中19名から

*弘前大学教育学部保健体育科教室

Department of Health and Physical Education, Faculty of Education, Hirosaki University

回答を得た)である。彼らに対しては、1年生の5月にも調査しており、定員170名中1年次160名、3年次149名の回答が得られたことになり、この2回ともほぼ、全体の傾向がつかめられる。

アンケートの内容は、大学入学時と現在の教員志望の強さ、小学校で教える8教科の重要性、好み、教え易さについての5段階評価、実技3教科必修の是非等よりなる。

結 果

表1に、アンケート調査の中から8教科の5段階評価の項目以外の結果をまとめて示した。1年次調査と

表1 アンケート調査の単純集計(括弧内は、左が1年次調査、右が54年入学生の3年次調査の結果、－は、該当選択肢なし:単位は%)

①教育学部が第1志望か

| | は い | いいえ |
|-----|------------|------------|
| 男 子 | 88 (86,63) | 12 (14,37) |
| 女 子 | 77 (77,73) | 23 (23,27) |

注:括弧内の値は本学部第1志望と他大学教育学部第1志望の合計

②入学時教員志望か

| | は い | いいえ |
|-----|------------|-----------|
| 男 子 | 91 (86,55) | 9 (14,45) |
| 女 子 | 93 (77,61) | 7 (23,36) |

注:前回の調査では教育学部第1志望の者のみに尋ねており、その回答数の全体に対する割合を示したので、やや低めである。

③現在の教員志望度は

| | ぜひなりたい | なれればなりたい | あまりなりたくない | なりたくない |
|-----|--------|----------|-----------|--------|
| 男 子 | 77 | 11 | 6 | 6 |
| 女 子 | 46 | 30 | 19 | 5 |

④現在3教科とも履修しているか

| | い る | 卒業までに取る予定 | 放棄しそう | 取らない |
|-----|----------|-----------|-----------|-----------|
| 男 子 | 51 (－,－) | 19 (33,－) | 25 (59,－) | 4 (8,－) |
| 女 子 | 64 (－,－) | 5 (33,－) | 19 (47,－) | 13 (20,－) |

注:1年次調査は、履修予定を尋ねたもの

⑤実技3教科は必修にすべきか

| | 必修賛成 | 消極的必修賛成 | 必修反対 |
|-----|------------|------------|------------|
| 男 子 | 31 (19,26) | 43 (32,34) | 26 (49,40) |
| 女 子 | 23 (21,58) | 57 (42,20) | 20 (37,22) |

⑥所属クラブは

| | 運動部 | 文化部 | 同好会 | な し |
|-----|------------|------------|----------|------------|
| 男 子 | 35 (30,50) | 12 (11,18) | 15 (－,－) | 38 (59,32) |
| 女 子 | 12 (20,36) | 23 (19,43) | 17 (－,－) | 47 (61,21) |

注:前回の調査では選択肢に同好会がないので、同好会所属の大部分はなしと答えたと思われる。

⑦現役か浪人か

| | 現 役 | 浪 人 |
|-----|------------|------------|
| 男 子 | 44 (47,80) | 56 (53,20) |
| 女 子 | 72 (75,86) | 28 (25,14) |

54年入学生3年次調査で比較できるものがある場合は、表中に並記した。入学時から教師志望の者が多いことや教育学部第1志望が多いことなどは前回調査と同様であり、過去をいつわる、あるいは曲げて記憶している者は少ないようである。また、現在の教師志望の強さをみると、男女とも、教師志望の者が多いものの、女子では「できればなりたいたい」とやや現実と妥協したような回答が多かった。1年次の調査では、教育学部第1志望の者に対してのみ、教員に志望の理由を尋ねているが、この時は「どうしてもなりたかった」「なりたかったが主な理由は勤務条件等である」「なんとなく」の中から選択させている。そこで、「なんとなく」を除いた回答を教員志望が強い者として、教育学部第1志望の者に対する割合を計算したところ、男子69%、女子68%となり、男子については、1年次調査と大差ない割合となった。ただし、この計算には、教育学部を第1志望としていなかった者は含まれていないので、実質的には教員志望の強い学生がある程度男子では増えたと言えるかも知れない。54年入学生の3年次調査の値は、同様に男子53%、女子61%であった。

表2 各観点からの評価の8教科内における順位

| | | | 国語 | 算数 | 理科 | 社会 | 家庭 | 音楽 | 図画工作 | 体育 |
|------------------|--------|------|----|----|----|----|----|----|------|----|
| 重 要 性 | 男 子 | 54年生 | 1 | 2 | 4 | 5 | 8 | 6 | 7 | 3 |
| | | 58年生 | 1 | 3 | 4 | 5 | 8 | 6 | 6 | 2 |
| | 女 子 | 54年生 | 1 | 2 | 5 | 4 | 8 | 6 | 7 | 3 |
| | | 58年生 | 1 | 2 | 6 | 4 | 8 | 5 | 7 | 3 |
| 好 み | 男 子 | 54年生 | 5 | 2 | 4 | 3 | 8 | 7 | 6 | 1 |
| | | 58年生 | 4 | 3 | 2 | 4 | 8 | 7 | 6 | 1 |
| | 女 子 | 54年生 | 1 | 4 | 8 | 5 | 2 | 3 | 7 | 6 |
| | | 58年生 | 1 | 2 | 7 | 6 | 5 | 3 | 8 | 4 |
| 教 え 易 さ | 男 子 | 54年生 | 7 | 1 | 2 | 4 | 6 | 8 | 5 | 3 |
| | | 58年生 | 7 | 2 | 2 | 4 | 6 | 8 | 5 | 1 |
| | 女 子 | 54年生 | 8 | 2 | 4 | 7 | 1 | 6 | 5 | 3 |
| | | 58年生 | 8 | 1 | 3 | 7 | 2 | 4 | 6 | 5 |

8教科の評価を昭和54年入学生の3年次の調査結果と比較すると、平均値では、3つの評価基準ともほぼ同様の値であり、また、8教科間の順位もほぼ同じであり(図1, 表2), 順位が3以上違った教科は、女子の家庭の好みについて(54年入学生で2位, 58年入学生で5位)のみであった。具体的には、国語・算数・体育が重要性を高く評価され、次が理科・社会であること、男子は体育が好きで家庭が嫌いであり女子は国語が好きであること、男女とも算数を教え易いと思っており、国語を教えにくいと思っていること等である。しかし、重要性の平均点は、男子の体育を除くと、どの教科も54年入学生の方が平均点が高かった。

次に、これら教科の意識の1年次から3年次への変化をみるため、5段階評価の平均値の差を図2に示した。前回の横断的研究同様、全体的にみると、各教科の重要性についての意識は向上するものの、好みや教え易さの評価の変化はまちまちであることがわかる。個々に見て行くともっとも重要性の評価が高くなったのが、女子では家庭、男子では理科であり、好みでは算数・家庭・体育が男女ともより好まれるようになり、反対に社会は嫌いの方向への変化がもっとも大きかった。教え易さでは、家庭がプラスに、社会がマイ

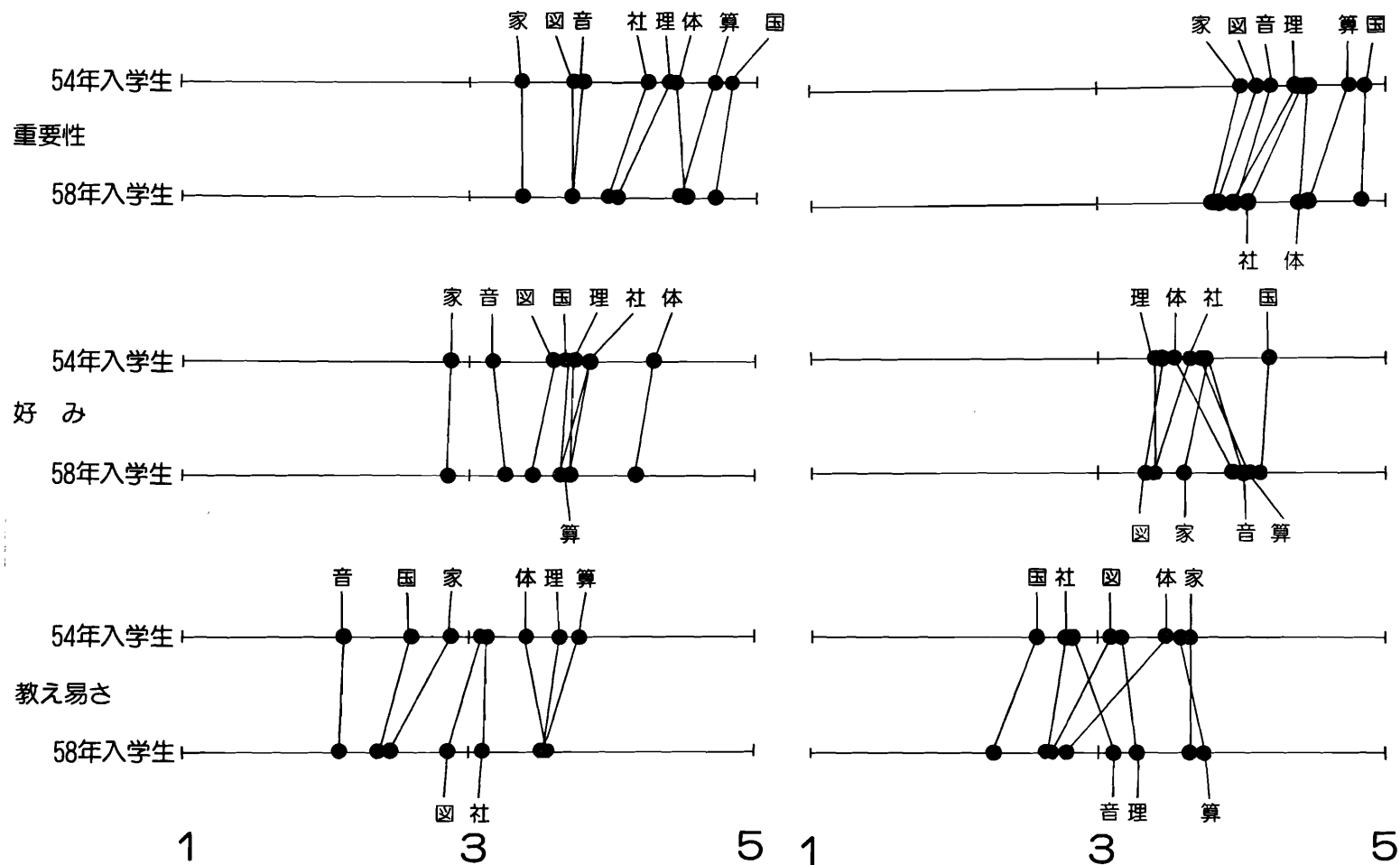


図1 昭和54年入学生と58年入学生の評価平均値の比較（左が男，右が女）

注：評価は，5～1（非常に重要である～あまり重要でない，好き～嫌い，教え易い～教えにくい）の5段階評価

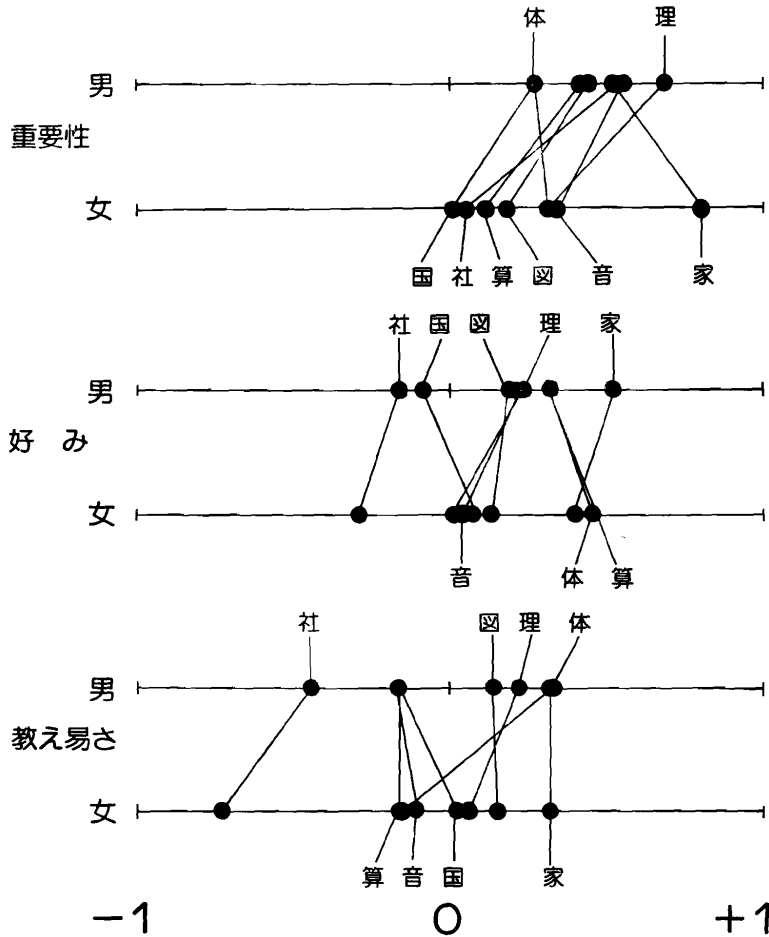


図2 昭和58年入学生の1年次調査と3年次調査における評価平均値の差
注：プラスは3年次調査の方が評価が高いことを示す。

ナスに変化していた。男子の体育も教え易い方に変化した。女子では、反対に教えるに難い方へ変化した。

次に、実技3教科の履修状況と3教科必修の是非についてみると(表1—④, ⑤), 2教科しか履修しない者は、1年次に取らないと答えた者のほぼ半数であった。また、女子の実技3教科必修に賛成する意見は54年入学生の3年次調査よりもかなり少なく、今回調査の学生については、彼らが1年の時の回答傾向とあまり変わらなかった。したがって、大学で授業や教育実習を受けると実技教科の重要性の意識が高まり3教科必修を是とする者が増える、という仮説は、少なくとも58年入学生に関しては支持されなかったことになる。しかし、不得意な教科は取らなくてよいので、という意見(以下必修反対とする)は少なく、大部分の学生は3教科とも取るから必修は2教科でよいという意見(以下消極的必修賛成とする)に移行しているようである。

彼らの所属サークルを見ると(表1—⑥), 1年次とあまり変わらず、54年入学生よりもクラブ所属者の割合が低い。

考 察

3年次調査の時点で、調査対象の学生は、3週間の教育実習を経験し、各教科の授業も大半は履修し終わ

っている。したがって、非履修者に対して調査を行った4年次との意識の差はそれほど大きくはないと思われるが、前回調査の結果から考えると、1年次と3年次の意識にはかなりの差があって当然と思われる。また、教員志望の強さについては、女子では多少現実に妥協する面も出てきているようであるが、一貫して教員を志望する者が多いと言えそうである。したがって、本学部の小学校課程の学生は、教員志望を堅持しながら学生生活を送ってきていると考えてよいだろう。これらのことを念頭において、結果を考えてみよう。

まず、8教科の意識の変化をみると、全体的傾向は、前回の横断的調査と同様で、変化したのは重要性の意識のみであった。変化の大きさを8教科の中で比較すると、結果で述べたとおりであり、前回調査とほぼ同じであった。これは、前回の報告で行った重要性の認識は大学での経験で高まるが、教え易さは、教育実習を3週間経験した程度では変化しない、という考察がほぼ正しいことを示している。好みと教え易さについて個々の教科の意識をみると、いくつかの教科はかなりの変化を示した。これを、前回の横断的調査の報告と比較してみると、結果で示した事実の大部分は前回も同様であった。しかし、女子の体育については、前回は、好みは高まらず教え易さの評価は高まったのに対して、今回は、反対に好みは高まったものの教え易さの評価は変化しなかった。これは、図1の上下を結ぶ線の傾きでわかるように、54年入学生と58年入学生の3年次調査の時の女子の体育の評価の平均点にかなりの差があることによる。

次に、重要性・好みと教え易さの相互の関連をみでみる。重要性・好みとも平均値が0.2以上上昇した教科を見ると、男女の家庭・体育と、男子の算数・理科・音楽である。これらの教科は、当然、教え易いと評価されると考えられるが、男子の算数と音楽、女子の体育はかえって教え易さの評価が低くなっている。これらの教科は、高校時代よりも深く学ぶことによってその教科の意義についての認識も高まり、自分もより好きになったが、教科の奥行を知ってむしろ教えるのが大変だという認識になったものと思われる。

次に、表1の各項目の回答を小専体育の履修者と非履修者に分けて集計してみると(表3)、女子の現在

表3 小専体育履修者群(上段)と非履修者群(下段)の回答傾向(括弧内は女子、数字は%)

| ①教育学部が第1志望か | | ②入学時教員志望か | |
|-------------|---------|-----------|---------|
| は い | いいえ | は い | いいえ |
| 90 (81) | 10 (19) | 95 (97) | 5 (3) |
| 75 (63) | 25 (37) | 63 (79) | 37 (21) |

| ③現在の教員志望度は | | | |
|------------|----------|-----------|--------|
| ぜひなりたい | なれればなりたい | あまりなりたくない | なりたくない |
| 79 (41) | 10 (31) | 5 (23) | 3 (5) |
| 63 (63) | 13 (26) | 13 (5) | 13 (5) |

| ④現在3教科とも履修しているか | | | |
|-----------------|----------|---------|---------|
| い る | 卒業まで取る予定 | 放棄しそう | 取らない |
| 58 (79) | 22 (5) | 20 (10) | 0 (6) |
| 0 (11) | 0 (6) | 63 (50) | 38 (33) |

| ⑤実技3教科は必修にするべきか | | |
|-----------------|---------|---------|
| 必修賛成 | 消極的必修賛成 | 必修反対 |
| 32 (21) | 42 (56) | 27 (23) |
| 25 (31) | 50 (58) | 25 (10) |

⑥所属クラブは

| 運動部 | 文化部 | 同好会 | なし |
|---------|---------|---------|---------|
| 34 (14) | 10 (21) | 17 (21) | 35 (43) |
| 13 (5) | 25 (32) | 0 (5) | 63 (58) |

⑦現役か浪人か

| 現 役 | 浪 人 |
|---------|---------|
| 42 (68) | 58 (32) |
| 68 (84) | 38 (16) |

の教師志望の強さを除いて、履修者の方が、第1志望で入学した者の割合が高く、入学時も現在も教師志望の者の割合が高い傾向にある。また、履修者の方が、運動部に所属する者の割合が高く、同好会にも所属しない無所属の割合が低い。また、浪人と現役の割合は、男女とも、非履修者群で現役の割合が高い。浪人してまでも本学部へ入学しようとする者の方が全体としては教員志望の意識が高いとも考えられる。

同様に、各教科に対する意識をみると（図3）、重要性については、両群に差があまり見られず、特に体育の重要性を低くみているわけではないことがわかる。男子においてはむしろ履修者群よりも高く評価している。好みと教え易さの評価については群間に相違がみられ、男女に共通していた。すなわち、非履修者群の方が、体育を好まず、音楽と家庭を好みかつ教え易いと思っている、という結果である。また、男子は、図画工作を教えるににくいと思っている者、女子では、理科を好まず教えるににくいと思っている者に非履修者が多かった。

3年次に小専体育を履修しなかった者が4年次で履修しているかをみると（表3—④）、ほとんどの者が4年次でも履修していないことがわかる。しかし、彼らの3教科必修の是非についての意見は履修者群とあまり変わらず（表3—⑤）、女子では、むしろ、非履修者群に必修を肯定する者が多いという結果であった。一方、はじめから履修しようとしなかったもっとも大きな理由を尋ねた付加アンケートによると、けがを除くと、男子では、「不得意」「他にやりたい科目がある」であり、女子では、これらの項目の他に、「取らなくても卒業できるから」という意見があり、この3つにほぼ3分された。取らなくとも卒業できるから、という意見の者が男子にいなかったことは、女子学生はまじめ、とよく言われる評価とは異なる結果であった。しかし、だからこそ、必修にすべきだ、という意見が非履修者群女子で多かったのかも知れない。

これらのことから、非履修者について考えてみると、体育や運動を好まない者が実技授業の意義は認めながらも履修しない方向に考えが進み、教員志望の度合いが低いと、履修しなくてもよいのだから、という易き方向に流れる、という傾向が読み取れる。

次に、実技3教科必修の是非への回答をもとにクロス集計をしてみると（表4）、前回報告同様に、女子で、体育の重要性と好みに低い評価を与えていた者の中に必修反対者が多い傾向にあった。一方、教員志望度との関係をみると、男子では必修賛成の者は全員が教員志望であった。女子ではこのような傾向はなかったが、教員志望のもっとも高いグループには、必修反対の者が少なかった。この結果からも、教員になるべき者は実技教科を取るべきである、とする全体的傾向が読みとれよう。

以上述べたように、58年入学生に関する限り、大学での授業で各教科の重要性の認識は深まったものの、実技教科必修に対する賛成者の割合は増えなかった。重要性の認識と必修にすべきだという認識と連動しない事態をどう考えるべきであろうか。結果から言えることは、彼らの行動様式が、必要あるいは重要だから履修する、という直接的なものではなく、それが、各教科の重要性の認識は増すもののそれらを必修にする意見に賛成する者の割合があまり増えなかった理由と考えられる。54年入学生と58年入学生でカリキュラムの変更は行われていないので、54年入学生で、特に女子が必修賛成に傾いた背景は推察が難しいが、54年入学生の女子の5割以上が入学時から実技3教科必修に賛成という意見を持っていたとは考えにくい。なぜな

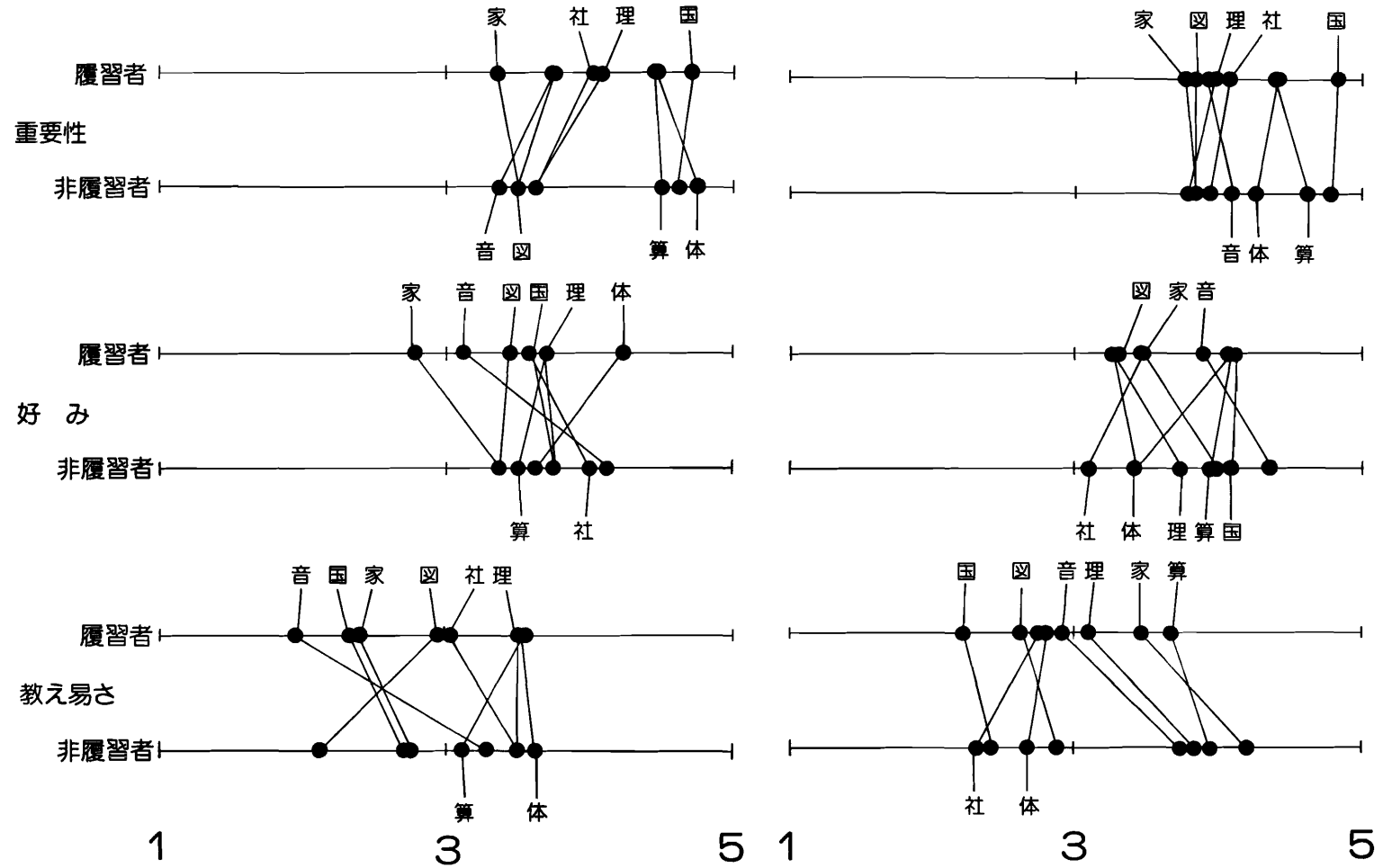


図3 小専体育履修者と非履修者の評価平均値の比較 (左が男, 右が女)

表4 実技3教科必修に対する意見をもとにしたクロス集計(括弧内は女子, 実数表示)

| ①現在の教員志望度 | | | | | ②体育の重要性 | | | | |
|-----------|---------|--------|-------|-------|---------|---------|-------|-------|------------|
| | 5・4 | 3 | 2・1 | 平均値 | | 5・4 | 3 | 2・1 | 平均値 |
| A | 20 (10) | 1 (4) | 0 (4) | 0 (1) | A | 18 (16) | 3 (1) | 0 (2) | 4.48(4.32) |
| B | 20 (22) | 4 (16) | 3 (5) | 2 (2) | B | 27 (41) | 2 (5) | 0 (0) | 4.59(4.59) |
| C | 11 (5) | 2 (4) | 1 (6) | 2 (1) | C | 16 (9) | 2 (6) | 0 (1) | 4.39(3.94) |

| ③体育の好み | | | | | ④体育の教え易さ | | | | |
|--------|---------|---------|-------|------------|----------|---------|---------|--------|------------|
| | 5・4 | 3 | 2・1 | 平均値 | | 5・4 | 3 | 2・1 | 平均値 |
| A | 16 (13) | 5 (5) | 0 (1) | 4.29(4.11) | A | 12 (4) | 8 (7) | 1 (8) | 3.76(2.79) |
| B | 18 (28) | 10 (12) | 1 (6) | 4.07(3.89) | B | 10 (11) | 15 (18) | 4 (17) | 3.21(2.78) |
| C | 15 (8) | 3 (6) | 0 (2) | 4.39(3.88) | C | 11 (3) | 7 (8) | 0 (5) | 3.83(2.75) |

| ⑤所属クラブ | | | | |
|--------|-------|--------|-------|---------|
| | 運動部 | 文化部 | 同好会 | なし |
| A | 9 (4) | 3 (4) | 3 (2) | 6 (9) |
| B | 7 (5) | 3 (12) | 6 (8) | 13 (21) |
| C | 8 (1) | 2 (3) | 1 (4) | 7 (8) |

A: 必修賛成 B: 消極的必修賛成 C: 必修反対

ら、教師志望で入学した者の割合は58年入学生の方がはるかに多いからである。したがって、54年入学生では必修に対する意見が入学後に変化したとすると、少なくとも、実技教科の必要性和重要性の認知が履修行動と58年入学生以上に結びついていたとは言えそうである。58年入学生については、最近よく言われる「最近の学生は授業にはよく出席して単位を取るが、自主性や主体性に欠けるきらいがある」という風潮を反映していると考えほうが妥当であろう。必修であれば文句を言わずに取るが、必修を増やすことには反対である、という主体性のなさが、重要であるとは思いながらも、それでは、必修にしようかという、選択で十分と回答する、易きに流れる行動パターンを取らせているとも言えるのではなかろうか。

次に、非履修者群が、男女とも、家庭と音楽を好む傾向にあることから、8教科の評価にある程度の相関が考えられた。そこで、回答分布の正規性に若干問題があるが、全体の傾向をつかむために、教科間の積率相関係数を各評価観点別に計算してみた(表5)。これをみると、重要性の評価の相関係数はすべてプラスであり、国語・算数・体育を除いた5教科間の値はすべて0.3以上であった。この解釈は難しいが、最重要3教科以外については全体的に高く評価する者と、低く評価する者がいると考えるとある程度は理解できるかも知れない。音楽と図画工作の相関が男女ともとびぬけて高いが、これは、芸術への理解がある学生とない学生がいるためと考えると理解できよう。好みと教え易さについてはプラスの場合もマイナスの場合もあり、相関係数が全体的に低いので、教科間の相関はないと言ってもよいであろう。したがって、非履修者群で家庭と音楽の好みの評価が高かったのは、好みに教科間の相関があるためではなかったようである。

次に、各教科内で、重要性、好み、そして教え易さの評価間の相関を見てみた(表6)。これをみると、重要性和教え易さの間には相関がないが、その他の2つの評価間にはある程度の相関があることがわかる。しかし、その値は大きくとも0.5程度である。また、かなり低い係数もある。一般的に考えても、価値があると思うものを好み、好むものは人に教えるのも易しいと考えられるので、納得できる結果と言えるが、相関が低い部分については、好みの評価が教員としての責務と切り離してなされるのに対して、他の評価が結びついて行われるためと考えられる。つまり、調査対象が、たまたまある教科を好まない集団であったとし

表5 3 視点からの評価についての8教科間の相関係数

| 重要性（男） | | | | | | | | | 重要性（女） | | | | | | | | |
|----------------------------------|--------|----------------|-------|-------|-------|-------|-------|------|----------------------------------|--------|----------------|-------|-------|-------|------|------|------|
| 算理 社会 家庭 音楽 図工 体育 | 数 科 | .232 .230 | .444 | | | | | | 算理 社会 家庭 音楽 図工 体育 | 数 科 | .382 .152 | .006 | | | | | |
| | 社会 | .257 | .115 | .543 | | | | | | 社会 | .222 | .245 | .426 | | | | |
| | 家庭 | .156 | .196 | .531 | .612 | | | | | 家庭 | .065 | .195 | .469 | .502 | | | |
| | 音楽 | .096 | .112 | .325 | .465 | .532 | | | | 音楽 | .354 | .016 | .417 | .277 | .235 | | |
| | 図工 | .095 | .184 | .440 | .472 | .539 | .715 | | | 図工 | .339 | .033 | .370 | .255 | .246 | .702 | |
| | 体育 | .329 | .274 | .118 | .196 | .249 | .350 | .284 | | 体育 | .460 | .147 | .445 | .298 | .305 | .552 | .444 |
| | 国語 | | | | | | | | | 国語 | | | | | | | |
| | 算数 | | | | | | | | | 算数 | | | | | | | |
| | 理科 | | | | | | | | | 理科 | | | | | | | |
| | 社会 | | | | | | | | | 社会 | | | | | | | |
| | 家庭 | | | | | | | | | 家庭 | | | | | | | |
| | 音楽 | | | | | | | | | 音楽 | | | | | | | |
| | 図画工作 | | | | | | | | | 図画工作 | | | | | | | |
| 好 み（男） | | | | | | | | | 好 み（女） | | | | | | | | |
| 算理 社会 家庭 音楽 図工 体育 | 数 科 | -.164 -.136 | .273 | | | | | | 算理 社会 家庭 音楽 図工 体育 | 数 科 | -.085 -.065 | .259 | | | | | |
| | 社会 | .287 | -.171 | -.034 | | | | | | 社会 | .318 | -.203 | .027 | | | | |
| | 家庭 | .229 | -.003 | -.126 | .163 | | | | | 家庭 | .202 | -.004 | .151 | .317 | | | |
| | 音楽 | .105 | .375 | .101 | .210 | .025 | | | | 音楽 | .093 | -.085 | .198 | .122 | .293 | | |
| | 図工 | .146 | .029 | .244 | .184 | -.129 | .160 | | | 図工 | .135 | -.047 | .250 | .269 | .296 | .128 | |
| | 体育 | .133 | .330 | .091 | .037 | -.062 | .225 | .208 | | 体育 | .026 | .162 | .010 | .148 | .083 | .149 | .085 |
| | 国語 | | | | | | | | | 国語 | | | | | | | |
| | 算数 | | | | | | | | | 算数 | | | | | | | |
| | 理科 | | | | | | | | | 理科 | | | | | | | |
| | 社会 | | | | | | | | | 社会 | | | | | | | |
| | 家庭 | | | | | | | | | 家庭 | | | | | | | |
| | 音楽 | | | | | | | | | 音楽 | | | | | | | |
| | 図画工作 | | | | | | | | | 図画工作 | | | | | | | |
| 教え易さ（男） | | | | | | | | | 教え易さ（女） | | | | | | | | |
| 算理 社会 家庭 音楽 図工 体育 | 数 科 | .205 .034 | .289 | | | | | | 算理 社会 家庭 音楽 図工 体育 | 数 科 | -.261 -.236 | .328 | | | | | |
| | 社会 | .390 | .088 | .297 | | | | | | 社会 | .091 | .003 | -.021 | | | | |
| | 家庭 | -.104 | -.033 | -.026 | -.007 | | | | | 家庭 | .121 | .109 | -.012 | -.064 | | | |
| | 音楽 | .064 | .009 | .037 | -.062 | .205 | | | | 音楽 | .004 | .045 | .193 | .111 | .268 | | |
| | 図工 | .042 | .215 | .339 | .352 | .204 | -.103 | | | 図工 | .219 | -.068 | .011 | .179 | .177 | .357 | |
| | 体育 | .187 | .395 | .395 | .289 | .010 | .039 | .342 | | 体育 | -.017 | .100 | .193 | .222 | .058 | .169 | .058 |
| | 国語 | | | | | | | | | 国語 | | | | | | | |
| | 算数 | | | | | | | | | 算数 | | | | | | | |
| | 理科 | | | | | | | | | 理科 | | | | | | | |
| | 社会 | | | | | | | | | 社会 | | | | | | | |
| | 家庭 | | | | | | | | | 家庭 | | | | | | | |
| | 音楽 | | | | | | | | | 音楽 | | | | | | | |
| | 図画工作 | | | | | | | | | 図画工作 | | | | | | | |

表6 各教科の3視点からの評価間の相関係数

| | | 国 語 | 算 数 | 理 科 | 社 会 | 家 庭 | 音 楽 | 図 工 | 体 育 |
|----------|-----|-------|-------|------|------|-------|------|-------|------|
| 重要性×好み | (男) | .421 | .147 | .199 | .375 | .129 | .203 | .350 | .083 |
| | (女) | .327 | .320 | .090 | .129 | .374 | .235 | .449 | .376 |
| 重要性×教え易さ | (男) | -.056 | .149 | .120 | .185 | -.154 | .034 | .051 | .060 |
| | (女) | -.169 | -.105 | .131 | .157 | .085 | .098 | -.011 | .073 |
| 好み×教え易さ | (男) | .154 | .426 | .557 | .440 | .235 | .564 | .542 | .386 |
| | (女) | .318 | .138 | .394 | .181 | .402 | .603 | .141 | .351 |

ても、その教科としての重要性は、普通に評価するであろうし、その教科を教える覚悟で学習していれば、必ずしも教えにくいとは評価しないだろうからである。このような場合は、評価間の相関係数は、低くなるはずである。

引用文献

- 1) 麓 信義・小山秀哉 「小学校教員養成課程学生の意識調査——体育科の実技授業を中心として——」 弘前大学教育学部紀要, 50, 45—60, 1983.
- 2) 麓 信義・小山秀哉 「小学校教員1年生の意識調査——学生時代の調査との比較を中心として——」 弘前大学教育学部紀要, 52, 61—70, 1984.